

第二次世界大戦

今回学ぶこと

第一次世界大戦が終結してわずか20年で第二次世界大戦が勃発したのはなぜだろうか。今回はその理由を知るために、ヴェルサイユ体制やワシントン体制などの国際秩序がどのような過程を経て崩壊し、ナチズムやファシズムの台頭を招いたかを探る。また、ヨーロッパやアジア、アフリカを巻き込んで戦われた第二次世界大戦によってもたらされた犠牲の大きさについても学んでいく。

調べておこう・覚えておこう

- 第一次世界大戦後には、戦争を繰り返さないためのさまざまな試みがなされた。ヴェルサイユ体制やワシントン体制など、第一次世界大戦後に築かれた国際秩序の特徴と、その問題点を調べてみよう。
- 1929年アメリカを発端とした大恐慌がどのようにして、世界各地に広がったのか？ また、なぜ経済不況がナチズムやファシズムの台頭を促し、日本の軍国主義を強める結果となったのかを調べてみよう。
- 第二次世界大戦が史上最大の犠牲を伴ったのはなぜだろう。特に犠牲が大きかった国や地域ではどのような戦いが繰り広げられたのか、民間人にどのような犠牲がでたのかを調べてみよう。

大恐慌、ニューディール、ブロック経済

第一次世界大戦後のアメリカは、大量生産と大量消費の時代を迎え、かつてない好景気にわいた。自動車や電気冷蔵庫、電気洗濯機など「アメリカ的生活様式」が一般家庭に広まったのはこの時代である。しかし、過剰な投機熱は1929年限界点に達し、10月に株価の大暴落が起こった。世界経済の中心となっていたアメリカでの不況の影響は、ドイツや日本を含む世界各地に波及して、世界大恐慌がはじまった。

アメリカでは、フランクリン・ローズヴェルト大統領が「ニューディール」を合言葉に、公共事業をおこし、失業者の救済にあたるなど、国内経済の立て直しを優先する政策をとるようになる。フランスやイギリスは、それぞれフラン圏、ポンド圏（スターリング・ブロック）を形成し、植民地や勢力下にある国々との間で排他的な経済圏をつくって、世界はブロック経済化した。

ナチズム、ファシズムの台頭

第一次世界大戦後の世界では、2つの国際体制が形成された。1つはヨーロッパを舞台とするヴェルサイユ体制、もう1つは、アジア・太平洋地域を対象とするワシントン体制である。ヴェルサイユ体制のもとで、ドイツは第一次世界大戦の責任を厳しく問われ、軍備制限や多額の賠償金支払いを求められていたが、1926年には国際連盟加盟も認められ、短期間ではあるがヨーロッパには安定が訪れた。

ワシントン体制は、海軍軍縮条約や、中国に関する門戸開放・機会均等の原則を確認する九か国条約を軸とするもので、この体制のもと、日本は英米との協調政策をとった。しかし、1930年代に入るとこの2つの体制は大きく揺らぐことになる。経済不況にあえぐドイツでは、ナチス党を率いるヒトラーが独裁体制を樹立し、1933年には国際連盟を脱退、1935年には再軍備宣言を発表した。日本でも1920年代末から次第に軍部の発言力が強まり、1931年には関東軍が満州事変を起こした。満州国不承認を不服とする日本は1933年に国際連盟を脱退した。1937年には盧溝橋事件を契機に日中戦争が勃発し、ワシントン体制は崩壊していった。

グローバル化する戦線と史上最大の犠牲

1939年9月、ドイツとソ連によるポーランド侵攻をきっかけにヨーロッパでの戦争が勃発したとき、日中間ではすでに全面戦争が起こっていた。中国大陸で苦戦する日本は、ヨーロッパ戦線でドイツが勝利をおさめるのを見て、フランス領インドシナに進駐し、日独伊三国同盟を締結した。日本の行動を警戒し、対日経済制裁を徐々に強めていったのがアメリカである。

アメリカが対日石油禁輸と日本人資産の凍結を決めると、1941年12月、日本は「死中に活を求めろ」として真珠湾攻撃に踏み切った。ここにヨーロッパ戦線とアジア戦線とが結びつき、戦争はグローバル化することになる。1945年8月の日本の降伏まで続く戦争は多大な犠牲を伴うものであった。連合国、枢軸国の双方が、都市爆撃を繰り返して民間人を殺傷し、広島、長崎に落とされた原子爆弾では合わせて30万が犠牲となったほか、被爆者は放射能の影響に苦しむことになった。また、日本軍は1930年代から続く中国各地での戦争で、重大な戦争被害をもたらした。また、ナチス・ドイツは、ユダヤ人や共産主義者などを敵視して絶滅政策を進め、各地に建設された絶滅収容所で600万人にのぼる人々が犠牲になった。